

IMAGE ARTS AND SCIENCES

日本映像学会報 No. 161, 2013

VIEW 展望

日本の映画と漫画と原作／中村聡史…2

INFORMATION 学会組織活動報告

日本映像学会第39回大会第一通信…3 機関誌編集委員会…4 『ICONICS』論文募集のお知らせ…4 支部・研究会だより 関西支部…6 中部支部…6-8 東部支部…8 クロスメディア研究会…8 会員研究テーマ…9-19 総務委員会…20

REPORT 報告

東部支部第30回映画文献資料研究会「映画『欲望の法則』における「声」の戦略」／西村安弘…5

FORUM フォーラム

教員公募のお知らせ…20

FROM THE EDITORS

編集後記…20

「Image Arts and Sciences / 日本映像学会報第161号」2013年1月1日発行
 発行人：豊原正智 編集担当／総務委員会：古賀太（委員長）・遠藤賢治・伏木啓・末永航・石坂健治・小出正志

日本映像学会事務局：176-8525 練馬区旭丘2-42-1 日本大学芸術学部映画学科内
 phone：03-5995-8287 / fax：03-5995-8209 / e-mail：JASIAS@nihon-u.ac.jp
<http://jasias.jp/>



日本映像学会

日本の映画と漫画と原作

中村 聡史

一般社団法人日本映画製作者連盟が発表した2011年(平成23年)日本映画興行収入上位20作品のうち、いわゆる実写作品で漫画を原作とする作品は、『GANTZ』、『GANTA PERFECT ANSWER』、『モテキ』、『岳ーガクー』、『カイジ2 人生奪回ゲーム』と、5作品におよぶ。その前年の2010年(平成22年)も20作品中6作品あり、現時点で年間の興収が確定してはいないが、上半期に限って言えば上位10作品中実に6作品が漫画を原作としている。これにアニメーション作品を加えればその数はさらに増えるが、実写作品に限定したとしても、上記の数字からも明らかなように、日本の映画は原作として漫画というものをよく使用しているということがわかる。

この事実に対して、それを批判的に受け止める風潮がある。曰く、漫画を原作とすることは話題性を高めることばかりが先行した安易な企画である。また、漫画の安易な実写映画化はその漫画作品が本来持つ特性や魅力を損ねてしまう、と。確かに、このような意見には説得力があり、首肯せざるを得ない面もある。しかし、日本の(実写)映画と漫画とは本当にそんなに相性が悪い関係なのであるだろうか。本年の「展望」では、日本の映画と漫画との関係について一考してみたい。

おそらく多くの人にとって、漫画が映像化される場合の媒体として真っ先に思い浮かべるのは、アニメーション、それもテレビ・アニメーションであろう。実際、日本初の国産テレビ・アニメーションが手塚治虫原作による『鉄腕アトム』(1963年～1966年)であったわけであるし、その後発展を遂げる日本のテレビ・アニメーションの多く、というより、その大部分が漫画を原作としているのであるから、漫画の映像化においてもっとも親和性が強いのがテレビ・アニメーションであるということは、ひとまず言えるであろう。しかし、テレビ・アニメーションとされる以前に実写版の『鉄腕アトム』(1959年～1960年)が存在したという事実もあるが、劇場用長編映画(フィーチャー・フィルム)でも、すでに漫画を原作とする作品は存在した。長谷川町子の『サザエさん』が1948年に実写で映画化されているのである。この日本を代表すると言ってよいであろう漫画『サザエさん』は実写映画の原作としてよく馴染んだのか、1950年代から1960年代初頭まで11本もの作品が制作されている。特に有名なのが江利チエミ主演によるシリーズ(1956年～1961年)であり、テレビ・アニメーション版が絶大な人気を誇る以前は、動く映像としての『サザエさん』とは江利チエミによるものであったと言えるだろう。つまり、漫画は、大衆文化としてより発展普及していった戦後(「アジア・太平洋戦争」後)すぐの時期から、映画とその関係をとり結んでいたわけである。

漫画と映画との関係で言うと、1970年代を無視するわけにはいかない。手塚治虫によって確立したとされるストーリー漫画から、より刺激的な表現を伴う、単なる児童向けで

はない、いわゆる劇画が誕生し人気を博していった1960年代末から1970年代、日本の映画界は誰もが知るように、斜陽の時代をむかえていた。各映画会社は減少していく映画人口を何とか食い止めんと、時代に沿った目新しい題材、人の耳目を引くような過激で刺激的な要素、具体的に言えば、セックスとバイオレンスを求めており、劇画、あるいは単に児童向けではない当時の漫画が、そのための素材として選ばれるようになった。例えば、小池一夫原作・小島剛夕画の『子連れ狼』は、若山富三郎主演で映画化(1972年～1974年)されており、シリーズ化もしている。特に三隅研次監督による作品は、血しぶきや人体破損の描写などにみられる、そのきわめてケレンにあふれる演出が目を引くものとなっている。また、篠原とおるによる『さそり』や『0課の女』は、それぞれ梶芽衣子、杉本美樹の主演で映画化(1972年～1973年、1974年)され、1970年代の東映を代表する作品として評価されている。これらの作品はいずれもセックスやバイオレンスがふんだんに盛り込まれており、原作である漫画の過剰で過激な表現がほぼそのまま映像化され、結果的に1970年代という時代の空気を濃密に漂わせている。

このような1970年代における漫画と映画との密接な関係は、1980年代になると、漫画を原作としつつもその内容や作風にとらわれない自由な作家の個性の発露のための素材という形に変化していく。例えば、柳沢きみおの「ラブコメ」漫画である『翔んだカップル』は、相米慎二という異能の映画監督によって映画化(1980年)されており、その長廻しを駆使した映像は独自の世界を形づくっている。また、高橋留美子のこれも「ラブコメ」漫画である『めぞん一刻』は、澤井信一郎の手によって映画化(1986年)されているが、原作のもつコミカルな雰囲気は影をひそめ、夢幻的で不可思議な世界が描出される。これは、監督である澤井の個性でもあろうが、それよりも、鈴木清順作品の脚本家として知られる、田中陽造の脚本に負うところが大きいであろう。これら以外にも鈴木則文による『伊賀のカバ丸』(1983年)、井筒和幸の『みゆき』(1983年)、あるいは那須博之による『ビー・バップ・ハイスクール』シリーズ(1985年～1988年)など、個性的な作家による漫画原作の作品が数多く作られている。

以上、1980年代までの日本映画と漫画との関係をざっと流し見してきたが、むしろ、1990年代以降もその関係は続いている。つまり、2000年代になってにわかに取り沙汰されている感のある(そして往々にして否定的に言及される)漫画を原作とする実写映画は、なにも昨日今日始まった問題なのではなく、もう半世紀以上も前から日本映画界に存在するし、ある意味で日本映画史を形づくっている重要な存在でもあるのである。もし、近年の漫画原作の日本映画に問題があるとするならば、それは漫画が原作であることに原因があるのではなく、また別の理由が存在するのだろう。

(なかむら さとし/帝塚山学院大学非常勤講師)

日本映像学会第 39 回大会第一通信

大会実行委員長 諏訪 敦彦

大会テーマ「アウト・オブ・コントロール (Out of Control) — 映像的思考をめぐって」について

想定外の津波が人間の築いた街や田畑を無感動に飲み込んでゆく映像、あるいは、ビルの屋上に車や船が漂着している想像を超えた奇異な風景の記録…。東日本大震災において、カメラは自然が制御不可能であるという単純な事態に、改めて直面することとなりました。文字通り「アウト・オブ・コントロール」となった原子力発電所の爆発の映像は、テクノロジーが自然を制御することは可能であると信じていた人間の歴史の崩壊を象徴するものとして、次の時代に繰り返し再生されてゆく映像なのかもしれません。

リュミエール兄弟が自然にカメラを向けた時、テクノロジーによって再生可能となった現実や自然が人々に与えた驚き、あるいは新しい視覚経験によって変更を余儀なくされた人間の認識が孕んでいた未解決の問題に、私たちは 100 年の時を隔てて対峙する事態に直面しているのかもしれない。映像のみならず、制御不能な状態はネットワークにおいてもさまざまな形で露呈し、われわれの想像を超えた速度で増殖してゆく不可視の領域を予感させます。現代は自然科学、経済、医療などのあらゆる分野でコントロールできないカオティックな事態が同時多発的に進行している時代といえるのかもしれない。

テクノロジーの進化が人間の経験を拡張し、新しい芸術表現を更新させていくと信じていることがもはや不可能である時代において、これまでの知識、経験、システムが何も通用しない地平に立って、「映像」と人間の関係を再び根本的に問い直し、思考し得ないものについての新たな思考＝「映像的思考」を開始する糸口を探索するの必要に迫られていると私たちは感じています。

かつて写真、映画、テレビジョンを包括する概念として機能した「映像」は、いうまでもなく今や、あらゆる領域に遍在しています。「映像」をめぐる思考も細分化され、分断されてますますはなればなれになるでしょう。しかし、そのカオスのなかでこそ、多角的な思考が交差し新たな「映像的思考」の可能性が拓かれるという思いをテーマに込めました。

今大会より若手研究者の積極的な参加が可能になるよう参加費などの変更を行います。新鮮な議論が交わされるよう準備を進めてゆく所存です。みなさま奮ってのご参加をお待ちしています。

大会開催校および実行委員会について

大会の開催校である東京造形大学は、1966 年に造形学部の下にデザインと美術の 2 学科を配しスタートし、日本では初となる「映像」をデザイン学科の専攻として立ち上げました。当初は「映画」と「写真」を包括する教育課程でしたが、現在は「映画」「写真」がそれぞれの専攻となり、また「アニメーション」「メディアデザイン」などの専攻をスタートさせています。2011 年度より新しい教育課程となり、学部すべての学生に「サステナブルプロジェクト科目」として持続可能な社会デザインに関する科目を必修とし、デザイン、美術を社会的な関係性の中でとらえることを実践的に学ぶ環境を整えつつあります。

日本映像学会大会は第 26 回大会 (2000 年) に引き続き、3 回目の開催となりますが、この間教育スタッフも大幅に入れ替わり、今回の実行委員会は映画専攻、アニメーション専攻の専任教員、特任教員、非常勤教員の会員と非会員の教員も参加して構成されます。前二回の委員長を務められた波多野哲朗氏を委員会顧問としてお迎えし、新旧の委員による活発な議論によって刺激的な大会となるよう努力してゆく所存です。

日本映像学会第 39 回大会実行委員長／東京造形大学長
諏訪 敦彦

大会開催概要

会期：2013 年 6 月 1 日 (土) ~3 日 (月)

会場：東京造形大学

〒 192-0992 東京都八王子市宇津貫町 1556 番地

Tel. 042-637-8111 (代) Fax. 042-637-8110

URL: <http://www.zokei.ac.jp>

交通：JR 横浜線「相原駅」よりスクールバス 5 分 (徒歩 15 分)

<http://www.zokei.ac.jp/smenu/access.html>

大会テーマ：「Out of Control (アウト・オブ・コントロール) — 映像的思考をめぐって」

大会プログラム：第 1 日 (6 月 1 日)

13:00~14:00 講演

14:00~17:00 シンポジウム

17:00~18:00 研究発表、作品発表

第 2 日 (6 月 2 日)

10:00~12:00 研究発表、作品発表

13:00~17:00 研究発表、作品発表

17:00~18:00 第 40 回通常総会

18:00~20:00 懇親会

第 3 日 (6 月 3 日)

10:00~17:00 エクスカーション (内容検討中)

※上記大会プログラムは予定です。委細は決まり次第、2013 年 2 月発行予定の「大会第二通信」および 2013 年 2 月開設予定の大会ウェブサイトでお知らせします。

大会参加費：会員：3,000 円

一般：2,000 円

大学生・大学院生：1,000 円

大会実行委員会：委員長 諏訪 敦彦

副委員長 小出 正志

委員 太田 曜、沖啓介、紙屋 牧子、河合 政之、木船 園子、木船 徳光、高橋 直治、土田 環、中嶋 莞爾、中島 崇、西村 智弘、屋間 行雄、宮崎 淳、渡辺 敦彦 (五十音順)

顧問 波多野 哲朗

大会発表申込：2013 年 2 月発行予定の「大会第二通信」に大会発表申込要領を掲載し、大会研究発表および大会作品発表の募集を行います。

大会実行委員会連絡先：

〒 192-0992 東京都八王子市宇津貫町 1556 番地

東京造形大学 研究事務室内

日本映像学会第 39 回大会実行委員会

Tel. 042-637-8111 (代) Fax. 042-637-8743

Mail. jasias2013@anizo.org

以上

機関誌編集委員会

藤井 仁子・板倉 史明

これまで隔年で刊行されてまいりました学会誌国際版『ICONICS』は、2010年発行の10号を最後に紙媒体での刊行を停止し、目下、電子版への移行作業に入っております。電子版刊行までのスケジュールと概要は、前期編集委員会内に設置された準備委員会によって作成され、『会報』No.156(2012年)ならびに『映像学』88号(同年)で公表されたとおりですが、とりわけ投稿をお考えの会員におかれましては、さらに詳しい執筆と投稿の要領をお知りになりたいことと存じます。編集委員会では協議の末、ようやく投稿募集の告知をお出しできる段階に達しましたので、この場を借りてごく簡単にご説明申し上げます。

まず、刊行までのスケジュールですが、予定どおり2013年6月末を締め切りとし、2014年3月末のオンライン刊行を目指してまいります。締め切りまで約半年となっておりますので、会員のみなさまにおかれましては、別途告知いたします投稿規定にもとづき、奮ってご投稿くださいますようお願い申し上げます。

また、従来から国際版では『映像学』に掲載された優秀論文を毎号1本翻訳して掲載してまいりましたが、電子版ではこれを毎号3本に増やすことを予定しております。会員の研究を広く海外に向けて発信していくことを重視した、準備委員会の考えを尊重しての方針です。翻訳論文の選定は、編集委員会が厳正な審議によって行ないます。翻訳論文に選ばれることで、著者の方にかえってご負担がかかってしまうという面もないとは限りませんが、編集委員会がさまざまなかたちでサポートいたします所存ですので、ご研究の海外発信のチャンスをぜひとも積極的に活用していただければ幸いです。

以上のように、『ICONICS』電子版の編集業務は膨大で多岐にわたり、『映像学』編集委員長が国際版の委員長も兼務することはきわめて難しいとのご意見を複数の会員から頂戴しました。そこで協議の結果、編集委員会内に国際版編集委員会を別に設け、板倉史明編集担当理事にその委員長を務めていただくこととしました。オンライン刊行までまだまだ多くの困難が予想されますが、会員のみなさまのご理解とご協力を切にお願ひ申し上げます。

(ふじい じんし/機関誌編集委員会委員長、早稲田大学文学学術院)

『ICONICS』第11号論文募集のお知らせ

日本映像学会では本学会の機関誌国際版『ICONICS』第11号に掲載する論文を募集いたします。本誌は学会員の研究成果を世界へ発信するための場として、1987年に第1号が刊行されてから2010年までに10号が刊行されており、計80本近い論文が掲載されました。発行誌は国外の主要な大学・研究機関・研究者に配布されております。

すでに『映像学』第88号における『ICONICS』電子版の発刊についてでお伝えしたとおり、2014年3月発行予定の次号から、インターネット上での発行のみとなり、紙媒体での刊行は行いません。また次号から招待論文を廃止し、それにともない編集委員会における海外委員の枠をなくしました。さらに過去の『映像学』に掲載された優秀な論文を国外へ積極的に発信するため、翻訳論文を毎号1本掲載してまいりましたが、次号より翻訳論文の数を3本に増やします(次号の翻訳論文の選定は、『映像学』81号から88号までに掲載された論文のなかから、ICONICS編集委員による厳正な投票によって行われます)。選定された翻訳論文のネイティブチェックについても、学会が必要に応じて経済的な助成を行うことができるようにいたしました。

投稿方法につきましても改訂いたしました。電子メールで原稿ファイルをお送りいただくと同時に、プリントアウトしたものを4部郵送していただくという方法を新たに採用いたします。

なお次号の『ICONICS』は、学会ホームページでの掲載のみならず、独

立行政法人科学技術振興機構が構築した「科学技術情報発信・流通総合システム」(J-STAGE)への登録・公開なども検討しております。J-STAGEは、国内の電子版ジャーナルが数多く公開されており、検索されるチャンスが増えるほか、海外の様々な電子ジャーナルサイトとの相互リンクも可能になります。

電子化によって『ICONICS』はいままで以上に国際的な発信力を増します。学会員の皆様におかれましては、この機会に積極的なご投稿をお願いする次第です。

ICONICS 編集委員会

(委員長) 板倉史明

(委員) 飯岡詩朗、加藤哲弘、兼子正勝、木村建哉、串山久美子、鈴木孝史、富田美香、中村秀之、堀潤之、前川修
(オブザーバー) 藤井仁子

投稿規定

1. 資格：日本映像学会会員
2. 内容：映像の理論・歴史・技術・応用に関する欧文で未発表の研究
3. 使用言語：英語・仏語・独語のいずれかとし、使用言語を母国語とする人に閲読してもらうことを原則とする。希望があれば編集委員会の方で閲読者を紹介することも可能(ただし、翻訳料等は投稿者負担、希望者は映像学会事務局まで連絡されたい)。
4. 分量：1万語(10,000 words)以内、すなわち誌面版組(70ストローク×42行)に換算して20枚以内。注・書誌等すべてを含む。なお、2千字程度の日本語レジュメを添付すること。
5. 体裁：完成原稿であること。また、注は文末脚注とすること。なお、ICONICS編集委員会所定のスタイル・シートを用意しているので、事前に学会事務局より取り寄せ、所定の体裁に沿って完成原稿を作成されたい(スタイル・シートは、学会のホームページ http://jasias.jp/journal/iconics/instructions_iconics からダウンロード可能)。
6. 提出方法：電子メールでのデータ入稿と同時に、原稿のハードコピーを下記送付先に4部郵送することとする。原稿データは、テキスト形式とワープロソフト形式(ワード、一太郎等が望ましい)で作成し、両ファイルを jasias@nihon-u.ac.jp宛てに添付ファイルにて送信すること。送信から1週間しても受領確認のメールが届かない場合は、映像学会事務局まで必ず連絡すること。原稿の表紙とレジュメには題名と総ワード数のみ記すこと。さらにメールの本文中に題名、執筆者名、住所、所属、電話番号、Eメールアドレスを明記すること。電子メールもハードコピーも、締切日までに、ICONICS編集委員会に到着しなければならない。
7. 締切：2013年6月30日(必着)
8. 刊行：2014年3月31日
9. 採否：ICONICS編集委員会が査読の上で決定する。
10. 校正：著者校正は初校のみとし、以後は編集委員会がおこなう。
11. 著作権：本誌に発表された論文等の著作権は日本映像学会に帰属する。したがって他の著作に転載する場合には、事務的な手続きのため、事前に文書等で学会に連絡すること。
12. 原稿送付先：データ：jasias@nihon-u.ac.jp (日本映像学会事務局 ICONICS編集委員会宛)
ハードコピー：〒176-8525 東京都練馬区旭丘 2-42-1 日本大学芸術学部映画学科内 日本映像学会 ICONICS編集委員会宛
13. その他：インターネットでの公開に際して、掲載が決まった執筆者に対して、和文や英文のアブストラクト等の提出協力を求める場合がある。

以上

(いたくら ふみあき/『ICONICS』編集委員長、
神戸大学大学院国際文化学研究所)

映画『欲望の法則』における「声」の戦略

西村 安弘

1949年スペイン生まれのペドロ・アルモドバルは、1975年のフランコ将軍没後にマドリッドで勃興した芸術運動<モビーダ>の中心人物の一人であり、「ポストフランコ、ポストモダン」¹の映画作家と見なされている。同性愛者や服装倒錯者が闊歩するそのスタイリッシュな作品群は、数多くの先行作品を引用・言及しながら、サスペンス、メロドラマ、コメディなどの多様なジャンルを横断する「パロック性」²豊かな世界として知られている。アルモドバルが設立した独立プロダクション<エル・デセオ>の第1回作品『欲望の法則』(1986)は、国際的な脚光を浴びた初期の代表作『神経衰弱ざりざりの女たち』(1988)の前作に当たり、「自伝的性格」³の最も濃厚な作品だと指摘されている。今回の発表では、これまで十分に論じられてこなかった『欲望の法則』における<声>の問題について注目してみた。

『欲望の法則』の冒頭シーケンスは、ヘテロセクシャルの観客の大半を困惑させ、居心地の悪い思いを抱かせるだろう。それは単に全裸の男性の姿を覗くという、ゲイ映画に典型的な表象が与える違和感であるのみならず、ここで青年に向けて発せられる声の主が誰であるのかが、必ずしも明確に示されないことにも由来するだろう。例えば、『カイエ・デュ・シネマ』の編集者だったフレデリック・ストロースは、「スクリーンの外にいる監督の指示で若者が自慰行為にふけています。」⁴といった不正確な要約をしているが、実際にはこの声はアフレコ室の声優に属するもので、アルモドバルの身分的な役割を負った劇中の映画監督パブロ(エウセビオ・ポンセラ)のものではない。しかしながら、完成された映画を見たアントニオ(アントニオ・バンデラス)は、映画館のトイレでこの扇情的な場面を反芻しながら自慰行為に耽った後、パブロに急接近してストーカー化して行く。映画ファンを象徴するアントニオの欲望を駆り立てているものは、スクリーン上の若者でも、彼に命令を発している声優でもなく、役者や声優を統御している監督パブロである。そしてパブロの背後に隠れているのは、この「自伝的性格」の濃厚な映画を完成させたアルモドバル自身に他ならない。メアリ・アン・ドーンは映画における映像と音声を結合させる契機となるスクリーン上の俳優を「幻想的身体」と見なしたが⁵、『欲望の法則』の冒頭シーケンスは、メタ映画の形式を採用しながら、こうした古典的映画を支える「幻想的身体」を批判的に捉え直そうとした試みとも理解されるだろう。

地方の貧困社会で育ったアルモドバルは、マドリッドの電話会社(テレフォニカ)で働いたことで、都会の中流階級の世界を知ったと語っているように⁶、パブロもアントニオも<モビーダ>を支えた富裕層に属する人物であり、本作において、電話はサスペンスやメロドラマを盛り上げる効果的な装置として利用されている。そもそも19世紀半ばまで、人間の声を含めた音は一度発せられた後は消え去るものだったが、電話、ラジオ、蓄音機といった電子メディアの登場によって、発音体(身体)と切り離され、無限に再生可能な「音分裂症」的世界が現出した。なかでも「広場のないしは井戸端会議的なコミュニケーションのメディア」または「劇場的ないしはラジオ的なメディア」だった電話は、1890年代から1920年代頃までに「個室と個室を密室的につなぐプライベートメディア」への変貌を遂げた。⁷この時代は、視覚的な記録装置として誕生した映画が古典的な物語技法を成立させた時期とも重なり、私的な密室に設置された電話は、D・W・グリフィスの『淋しい別荘』(1909)からアルフレッド・ヒッチコックの『ダイヤルMを廻せ』(1954)までのサスペンス映画において、暴漢に襲われた女性が空間的に隔てられた彼女の夫、あるいはボーイ・フレンドに助けを求めるために欠かせない小道具となった。(改めて説明するまでもないように、電話は男性器の象徴である。)⁸『欲望の法則』のクライマックスで、アントニオと同居を始めた性転換者のティナ(カエウメン・マウラ)に弟のパブロが危機を告げる電話をかける場面は、こうした映画史的な記憶を呼び覚まさずにはおかないだろう。また、パブロが恋人のファン(ミゲル・モリーナ)と通話した直後、今度はアントニオからの電話を受けるスプリット・スクリーンの場面は、映画の録音技師(ジョン・トラボルタ)と高級売春婦(ナンシー・アレン)の通話を同様の形式で捉えたブライアン・デ・パルマの『ミッドナイト・クロス』(1981)の直接的な引用のように思われる。しかしながら、『欲望の法則』においては、こうした電話にまつわるクリシェの継承以上に重要なのは、劇中でパブロの演出作品として登場するジャン・コクトーのモノローグ劇『人間の声』(1930)であろう。

1930年2月17日にコメディ・フランゼーズで初演された『人間の声』では、5年間の交際を経た後、年下の男性から別れ話を告げられたある女性が唯一の登場人物となり、アパートマンの電話を相手にした一人芝居が繰り広げられる。

舞台上にはヒロインの姿しか現れないが、三単一の法則に従った古典主義的な構成を採っていることから判るように、その物語内容はローマ皇帝ティチウスとパレスティナの女王ベレニスとの悲恋を題材にしたジャン・ラシーヌの政治物悲劇『ベレニス』(1670)を参照したものだ。『欲望の法則』に続く『神経衰弱ざりざりの女たち』について、アルモドバル自身は『人間の声』の翻案から出発し、最終的には「絶望したひとりの女性が、思い出のぎゅうぎゅうに詰まったスーツケースの横で愛する男からの電話を待っているという設定」だけが残ったと語っているように⁸、彼にとって特に思い入れの深い作品でもある。(ロベルト・ロッセッリーニがアンナ・マニャーニを起用した『アモーレ』(1948)の第1話として映画化したこともあるので、ネオレアリズモ映画をパロディ化した『グロリアの憂鬱』(1982)の監督でもあるアルモドバルが、ロッセッリーニ版を参照にした可能性も否定できないが、その確証はない。)

『欲望の法則』に引用された劇中劇『人間の声』の場面では、ティナが名前のないヒロインを演じる一方、移動車に乗った少女アダ(マヌエラ・ベラスコ)がジャック・ブレルのシャンソン『行かないで』(Ne me quitte pas(実際に使用されるのは、ブラジル人女性歌手マリサ・マタラソのカヴァー曲)に併せて舞台前面を横切ることで、「行かないで」Ne me quitte pasが「(電話を)切らないで」Ne quitte pasというフレーズを連想させるという演出が施されている。『薔薇の葬列』(1970)のピーターのように、ティナは父親と肉体関係を持った後、モロッコで性転換手術まで受けたのだが、結局は棄てられてしまった過去を持つ。アダは国際的に活躍するモデルの母親(ビビ・アンデルセン、有名なスウェーデン女優の名前を頂いた本当の性転換者)から長らくネグレクトされ、ティナの家に同居している少女である。ここで注目すべきは、『人間の声』のヒロインの「行かないで」あるいは「切らないで」という心中の叫び声が、舞台上で登場するティナとアダという二人の女(一人は性転換者だが)の私生活を反映しつつ、しかも舞台上の肉体から切り離された電子機器から発せられていることだろう。何故ならば、この『行かないで』は演出家パブロのお気に入り、ファンと別れる前の逢瀬の時にも再生されるレコードの曲でもあるからである。役者の身体から切り離された歌声は、パブロの心の叫びを代弁することで、最終的には本作の監督であるアルモドバルに帰着するのである。

映画『欲望の法則』において一貫しているのは、声を統御する者=監督のパブロが映画ファンのアントニオの欲望を駆り立てている図式であり、この図式が脅かされるのは、拳銃を手にしたアントニオがティナのアパートに入ってくるよう、パブロに命令を下す時である。ロラン・バルトはラシーヌ悲劇の本質を「権力を握って愛する者は愛されず、愛されるものには権力がない」と喝破したが、映画ファンが暴力で監督を支配下に置こうとした時点で、彼は愛されない運命を受け入れたことになるだろう。

註

- 1 Kathleen M. Vernon & Barbara Morris, "Introduction: Pedro Almodóvar, Postmodern Auteur" in *Post-Franco, Postmodern: The Films of Pedro Almodóvar*, edited by Kathleen M. Vernon & Barbara Morris, Greenwood Press, Westport, Connecticut & London, 1995, pp.1-23. (キャスリーン・M・ヴァーノン、バーバラ・モリス「ペドロ・アルモドバル、ポストモダンの映画作家」(『ポストフランコのスペイン文化』杉浦勉編、水声社、1999年。)所収、168～196頁。)
- 2 野谷文昭「パロックとメビウスの輪」(『キネマ旬報』2012年5月下旬号、34～35頁。)
- 3 Paul Julian Smith, *Desire Unlimited: The Cinema of Pedro Almodóvar*, Verso, London & New York, second edition, 2000, p.79.
- 4 *Almodóvar on Almodóvar*, edited by Frédéric Strauss, Faber and Faber, London, 1996. (『ペドロ・アルモドバル 愛と欲望のマタドール』、フレデリック・ストロース編、石原陽一郎訳、フィルムアート社、2007年、105～106頁。)
- 5 メアリ・アン・ドーン「映画における声」(『新映画理論集成②知覚/表象/読解』所収、フィルムアート社、1999年、312～327頁。)
- 6 前掲書『ペドロ・アルモドバル 愛と欲望のマタドール』、28頁。
- 7 吉見俊哉「『声』の資本主義 電話・ラジオ・蓄音機の社会史」、河出書房新社、2012年、152頁。
- 8 前掲書『ペドロ・アルモドバル 愛と欲望のマタドール』、116頁。

支部・研究会だより 関西支部

大橋 勝

関西支部では、神戸学院大学人文学部の赤井敏夫会員のお世話により、第 67 回研究会を下記の通り開催いたしました。

第 67 回日本映像学会関西支部研究会

日時：平成 24 年 12 月 8 日 (土) 午後 2 時より

会場：神戸学院大学有瀬キャンパス 9 号館 6 階 961 教室

研究発表 1：ジャン・コクトーの映画『詩人の血』(1930) にみるデュッサンからの変容

大阪大学大学院文学研究科博士後期課程 水田百合子会員

研究発表 2：インド映画におけるジャンル〜テルグ語映画のフォークロア映画を題材に〜

神戸学院大学人文学部 赤井敏夫会員

水田会員の発表は、フランスの詩人ジャン・コクトー (1889-1963) の映画作品『詩人の血』(1930) を取り上げ、その制作過程を同時期のデュッサンや文章を手掛かりに分析するものであった。作曲家ジョルジュ・オーリックがアニメーションのための曲を作りたいと表明したこと、端を発し、紆余曲折を経て本作の製作に繋がっているのだが、デュッサン・アニメの注文に対し、線描画家としての自己を見出すことのできる自由な映画の形式がここでは追求されている。コクトーは阿片の解毒治療の苦しみと治癒の過程を記した日記『阿片』(1930) を出版しているが、その文章やデュッサンには『詩人の血』の原型とみられるモチーフがある。たとえば身体にできた傷口や手足がもがれた人物、周囲の物体と一体化する身体などである。これらは映画の中の人物、彫像、オブジェに繋がるものであると発表者は指摘している。鏡の世界に出入りする詩人は、超越的な美へと接近することを許された特別な存在であり、映画術を用いることによってその世界をリアルに表現するというコクトーの意図が提示された。

赤井会員の発表は、インド映画特有のジャンル分け「ソーシャル/ミソロジカル/ヒストリカル」について、テルグ語映画のフォークロアというサブジャンルを手掛かりに考察するものであった。テルグ語映画はインド映画市場の中でも神話映画が多数製作されてきたという特徴があるが、厳密にはミソロジカルには分類しにくい、境界領域のジャンルがあることを発表者は指摘している。これは現在ソシオ・ファンタジーと呼ばれるが、40～50 年代にかけて流行したフォークロア映画が先駆型としてあるらしい。このジャンルの成立には様々な要因や影響関係が想定できるが、発表者はいくつかの切り口から説明している。特にミソロジカルに対して土俗的なデヴオーショナルという軸が重要な概念であろう。豊富な現地調査を元にした研究の奥行きと豊かさがうかがえる発表であった。両発表とも活発な質疑応答が行なわれ、今後の研究の展開に繋がる議論をもつことができた。

研究会終了後に 2012 年度日本映像学会関西支部総会が行なわれ、本年度活動報告と会計報告、2013 年度の活動案と予算案が提案、了承された。その後新神戸まで異動し、発表者を囲みおいしい中華料理とお酒で懇親会を行いました。

今後の活動計画としては 3 月に花園大学で第 68 回研究会を行う予定です。恒例となりました夏期映画ゼミナールを 8 月 3 日(土)～5 日(月)に京都・関西セミナーハウスで開催します。プログラム、テーマ等は現在検討中です。決まり次第お知らせしますので、それまでお待ち下さい。

(おおはしまさる/大阪芸術大学)

支部・研究会だより 中部支部

和田 伸一郎・尾鼻 崇

中部支部では下記の通り、2012 年度第一回研究会と第二回研究会をそれぞれ 9 月と 12 月に開催した。

■ 2012 年度 中部支部第一回研究会

日時：2012 年 9 月 15 日 (土) 15 時～18 時

会場：中部大学名古屋キャンパス [三浦記念会館] ホール

□プログラム前半：

瀧健太郎氏 (早稲田大学) による講演

・講演について

ビデオ・アーティストとしてご活躍中の瀧健太郎氏 (早稲田大学川口芸術学校専任講師/映像学会会員) をお招きし、氏が昨年、制作されたドキュメンタリー映画『キカイデミルコト』のダイジェスト版の上映と、日本のビデオ・アートについてご講演いただいた。

・講演の概要

現在の日本のメディア・アート状況を見渡すと、産業化しやすいエンターテインメント (ガジェット) としての「メディア・アート」か、欧米のアートマーケットを意識した「アート系映像作品」に、大別されてしまっているのではないだろうか。しかし、ビデオメディアの登場した 60-70 年代の数々の試みには、本来そのようなフレームに閉じない豊穣さがあったことが窺える。つまり、かつてのビデオアートと呼ばれたものには、産業化やアートを意識しないからこそ、表現としてある種の純粋性や、「見る」という哲学的考察が常に意識されていたのではないか。「キカイデミルコト」の制作を通して瀧氏が改めて実感された 60-70 年代のメディア状況から、今後の映像やメディアを用いた表現の可能性とその意義についてお話しいただいた。

□プログラム後半：

小川真理子会員 (相山女学園大学) による研究発表

・研究発表について

小川真理子氏に、制作中のドキュメンタリー作品のダイジェスト版上映と、研究報告を行っていただいた。

・発表要旨

発表者は、2012 年 8 月、フランスで行われた舞踏家、若松萌野氏のワークショップの様相を撮影、現在、彼女の表現活動についてのドキュメンタリー映像を制作中である。今回の発表では、映像の一部を紹介しながら作品の意図を報告する。若松氏はニューヨークで活動後、拠点をヨーロッパに移し、近年は夏にノルマンディー地方にある自宅を開放して二週間の集中ワークショップを行っている。「私のダンスの基本は、とてもシンプルだ。それぞれの状況において、自分を取り囲むもの / 自己の外にあるもの (the environment) に対して、誠実であろうとすることだ。そのためには、身体をとおして、その取り囲んでいるものそれ自体に語らせることである。それは、存在となり、身体性となり、運動となるだろう。」このように語る若松氏独自の「空間」と「時間」の理論が、ワークショップの参加者に対して、具体的にアプローチされる。そして、フランスだけでなく、イタリア、ギリシア、ポルトガルなど多様なヨーロッパの参加者たちによる、彼らの身体における試みも興味深いだろう。「奇異な」と判断されがちな舞踏表現であるが、発表者は、とくに、若松氏のワークショップでの実践を映像化することで、そのような判断が想定していないような理論的奥行きを表すことを目標とした。

・支部総会

■ 2012年度 中部支部第二回研究会

日時：12月7日（金）18時～20時30分

会場：名古屋市立大学芸術工学部

□プログラム第一部：

マイケル・クランドール (Michael Crandol) 氏 (ミネソタ大学博士後期課程／名古屋大学) によるゲスト発表

タイトル：「中川信夫監督『東海道四谷怪談』(1959年)：怨霊と象徴」

・発表要旨

「四谷怪談」は、日本で最も有名なゴースト・ストーリーゆえに、日本映画史上何度も作品化されてきた。その中で最も高く評価されているのは1959年に新東宝が製作・配給した中川信夫監督の『東海道四谷怪談』だが、それは一体なぜだろうか。まず、「四谷怪談」という怪談の由来と変化に関して簡単に説明し、次に、中川監督作品以前に作られたものについて検討し、最後に中川監督の『東海道四谷怪談』の分析を試みたいと思う。特に登場人物の中で、お岩の幽霊が、本物の恐ろしい怨霊としても、また、主人公の内面的な罪の象徴としても同時に描写される点に注目する。どのような方法で中川監督はその効果を獲得したのか。これについて考えるために、中川監督によるバージョンの三年前に同じ新東宝スタジオで撮影された毛利正樹監督の『四谷怪談』(1956年)と比較する。特にお岩の幽霊が出てくる場面の形式的要素を比較すれば、中川監督の『東海道四谷怪談』が単なる怪奇娯楽ではなく、興味深いホラー映画と呼ぶに値すると発表者は考える。

□プログラム第二部：

中沢あき氏 (映像作家、オーバーハウゼン国際短編映画祭キュレーター) による講演

タイトル：「オルタナティブな映像作品と社会の関係及び、非商業的映画祭の役割 — 独・オーバーハウゼン国際短編映画祭の一例」

・講演要旨

1954年に創設されたオーバーハウゼン国際短編映画祭 (Internationale Kurzfilmtage Oberhausen) は、様々な形式やジャンルを超え、短編映画の独自性を紹介してきた映画祭であり、また映像作品の前衛性や実験性に特に注目することで知られる。インターナショナル、キダーフィルム、ドイツ国内など複数のコンペティション枠及び、テーマプログラム、作家特集プログラムなど、作品数にして約200本が5日間に渡って上映され、観客動員数は毎年1万7～8千人程。ドイツの映画史にも重要なマイルストーンであるオーバーハウゼン宣言が行われた映画祭でもある。カンヌやベルリンとは違い、決して商業的な方向性にあるとは言えないこの映画祭が、市や州からの大きな公立の助成を受けながら運営を続けているのは何故だろうか。ドイツの社会における文化思想をヒントとして、映画また芸術文化と社会の関係性を、欧州でのオルタナティブ文化を巡る現状に触れつつ報告する。

■ 2012年度の今後の計画

次回、第三回研究会は3月上旬に名古屋学芸大学にて開催し、研究発表と学生作品プレゼンテーションを予定している。

(和田 伸一郎／わだしんいちろう／中部大学人文学部)

■研究会報告

第一回研究会では、まずビデオ・アーティストの瀧健太郎氏によって、氏が制作したドキュメンタリー映画『キカイ デ ミルコト—日本のビデオアートの先駆者たち—』(ダイジェスト版)の上映と解説を交えつつ、日本のビデオアートの現状についての講演が行われた。



『キカイ デ ミルコト』は、ビデオアート黎明期のアーティストの証言と作品を映像で紹介することを目的としたドキュメンタリー作品である。瀧氏は、ドキュメンタリー制作のために行った30名を超えるアーティストや関係者へのインタビューから、ビデオアートの特質を「即時性・即興性 電子のアート」、「偶然性／プロセスのアート」、「客観性・構造の可視化」、「集積・コンテキストのアート」、「参加者／未決定のアート」の六種類に分類する。さらに、「知覚を反証するメディアとはなにか」という問題をとりあげ、「タイムベースト」、「フィードバック」、「電子的映像性」、「見ることと考えること」という四点からの言及を試みる。「今一度ビデオというモノを正面から捉えなおす必要がある」という瀧氏の主張は、高度情報化が進みメディアが飛躍的に多様化した今日において、極めて示唆的であるといえるだろう。

瀧氏が自らの制作活動の過程で築いてきた知見は、今日のメディア・アートやビデオアートの現状を考えるために大変有用であるが、それに留まらず、今日の我々の周囲にある様々な局面——たとえばビデオゲームのようなインタラクティブ・メディア——を捉えるためにも興味深い示唆を与えてくれるといえよう。

続いてプログラムの後半では、相山女学園大学の小川真理子会員によって、現在制作を進めている舞踏家・若松萌野氏を対象としたドキュメンタリー作品についての研究発表が行われた。今回のドキュメンタリー作品は、小川氏が7月29日から8月9日にかけてフランスで催された若松氏のワークショップに参加し、その際に撮影した映像をもとに構成されている。

今回の発表で取り上げられた大きなテーマのひとつに、舞踏という表現方法にもとづく「身体」の問題がある。昨今、この「身体」という単語は至る所で見聞きすることができるが、その意味はなんとも扱い難い混雑なものといわざるを得ない。小川氏はこの身体を「若松氏の生活や生き方、そして時間の流れが身体に刻み込まれていくもの」として捉えて自論を展開する。このような「環境の一部として自分を捉える」という表現が生み出す「空間」と「時間」は、映像という媒体との親和性の高さが予想できる。この点に、今回の作品を「通常のドキュメンタリーとは異なる形で映像をまとめてみたい」という小川氏の言葉の意味がうかがえる。

第二回目の研究会では、ミネソタ大学からの留学生であるマイケル・クランドール氏によって、中川信夫の『東海道四谷怪談』(1959)を中心とした研究報告が行われた。クランドール氏はまず、「四谷怪談」と

いう歌舞伎狂言や、それを題材とした映像作品を俯瞰する。「四谷怪談」の映像化は、映画をはじめテレビドラマやアニメーションなど様々なメディアにおいて行われてきているが、今回の発表では、その中でもとりわけ評価の高い中川信夫の劇場版を中核におきつつ、1949年に上映された木下恵介版『四谷怪談』や、毛利正樹が1956年に手掛けた『四谷怪談』を比較対象として用いて分析がなされた。

発表は、いくつかのシーケンスの映像提示を交えつつ行われたが、中川信夫版『東海道四谷怪談』の特色が最も鮮やかに読み取れたのは、やはり「お岩の幽霊」が登場するシーンであろう。中川版のこのシーンにおける「お岩」は、「恐ろしい怨霊」であると同時に、主人公の内面的な罪の象徴としての存在という二面性が与えられている。これによって、『東海道四谷怪談』の怪談としての恐怖感を担保すると同時に、現代観客の興味に即した上質なシネマとしての価値を持つという指摘をもって報告は締めくくられた。

第二回研究会の後半では、「オーバーハウゼン国際短編映画祭」のキュレーターであり、自身も映像作家として活躍する中沢あき氏による講演が行われた。今回の講演では、オーバーハウゼン国際短編映画祭がどのように運営されているのか、その背景をドイツ・オーバーハウゼンという土地や、経済的状況、そして映画祭で取り上げられる作品の紹介と視聴といった多面的な視点から説明がなされた。



文化事業への風当たりが厳しい昨今の風潮の中で、オーバーハウゼン国際短編映画祭の運営資金はその大半を国や市からの助成によって賄われている。これは講演中にも述べられたとおり、オーバーハウゼンという土地と、その伝統的な価値観に依拠するところが大きい。思い起こせば、我が国でも、近年、諸芸術に対する文化振興や福祉的な試みに関心がむけられているが（たとえば文化庁の「クール・ジャパン戦略」などはまさにその好例といえるが）、その試みの多くは海外の後塵を拝しているといわざるを得ない。その意味で、この映画祭はおおいに学ぶ点の多い先行事例であるといえよう。

加えて、オーバーハウゼン国際短編映画祭では新しい試みも積極的に進められており、たとえばインターネットを用いた作品の応募も2006年から先駆をきっている。さらに、昨年度からは正式に作品のデジタルアーカイブとウェブ上で公開も行われており、このような先進的な動きもまた、この映画祭を成功へと導いたひとつの理由とみて間違いなまいだろう。

オーバーハウゼン国際短編映画祭は1954年に創設された長い歴史を持つ映画祭であり、2010年には日本人監督の受賞歴さえあるものの、我が国は未だ紹介される機会は少ない。今回は大変貴重な講演であった。

(尾鼻 崇／おばな たかし／中部大学人文学部)

支部・研究会だより 東部支部

奥野 邦利

前号の会報にて問題提起しました、①支部補助金の利用範囲やその方法、②研究会企画委員会直属の研究会と東部支部研究会との関係、③東部支部に含まれる東北、北海道両地区に対する補助金の活用、これらのことを理事会での討議を踏まえながら、総合的な対策を検討しております。会員諸氏の活動に資するよう、新たな東部支部のかたちをできるだけ早くお示しします。

(おくのくにとし／東部支部担当常任理事、日本大学芸術学部映画学科)

クロスメディア研究会

李 容旭

第6回(2012年度第1回)クロスメディア研究会開催のご案内

第6回クロスメディア研究会を下記のごとく開催します。
会員の皆様のご参加をお待ちしております。

講演者：曾我傑氏(サウンドアーティスト)

開催日時 2013年1月26日(土) 15:00-16:30

開催場所 東京工芸大学芸術学部 中野キャンパス 1102教室

www.t-kougei.ac.jp/guide/campus/access/#nakano

講演タイトル：『環境とカルティベーション』

講演内容

- 1) 作品概念の解体と新たな方向の模索
- 2) モダニズムへの懐疑-自由体へのプロセスあるいはステップについて
- 3) ムーブメント創出-カルティベーション
- 4) 器官なき身体の理性
- 5) 前衛の触角でのみ真に物の平等を保障しよう
- 6) 環境認識の幅
- 7) 口語体芸術への指向
- 8) 即興芸術について
- 9) 時間の身体化と前衛の時間
- 10) 芸術における動産、不動産の区別
- 11) ミニマリズムとモノ派
- 12) 現代をネオ・マニエリスムとして眺める
- 13) 質疑応答の時間-教育について

曾我傑氏プロフィール

15歳頃まで音楽の基礎を祖父と父から学ぶ。またピアノ奏法を佐々木房江氏に師事。後に作曲法(主に作曲一般論)を佐野清彦(作曲家)に、和声・対位法(主に中世における)を近藤謙(作曲家)に、ギター演奏法を小原安正、小原聖子、ナルシソ・イエベスに、リュート演奏を荒川孝一に師事。音楽表現を松本浩(元NHK交響楽団ホルン奏者)に師事。皆川達夫に中世音楽史(主にバロック、ルネサンス期のヨーロッパ音楽)を学ぶ。

1971年～1975年の間、東京アメリカンセンターにてテリー・ライリー、NYにてジョン・ケージに「現代の作曲と可能性について」を学ぶ。

1971年より2年間、北村実(早稲田大学文学部哲学科)の私塾にて、「唯物弁証法、弁証唯物論、科学的社会主義論、ヘーゲルからマルクスへ、マルクス・エンゲルス全著作比較試論」などを学ぶ。

1973年頃より佐野清彦、多田正美らと共に現代音楽作曲、演奏グループ「GAP」の活動を開始し様々な音楽の試みを行う。

後に準法人活動体として「GAP WORKS」となり、オルタナティブ・レーベルの活動を続ける。

自身の音楽活動と並行して70年代より広く演劇、舞踏、ダンス、諸イベント、各地の芸術祭などに多角的に関与し今日に至る。

特に70年代後半より劇場公演に活動をフォーカスし、同時にNYラ・ママ劇場、ロンドンICAスペース、シドニー・オペラ・ハウス等において劇場技術(音響、照明を中心に)を習得する。

以上。

[問い合わせ先]

日本映像学会クロスメディア研究会 代表 李容旭
〒164-8678 東京都中野区本町2-9-5 東京工芸大学芸術学部映画学科
lee@img.t-kougei.ac.jp Tel&Fax 03-5371-2717

(りょううく／東京工芸大学芸術学部映像学科)

2012年11月実施会員アンケートより 会員研究テーマ

事務局

◆氏名 (しめいよみ)

所属/専門

- (1) 研究テーマ1
- (2) 研究テーマ2

東部支部

◆阿 金 (あじん)

SGRA 研究員欧米・アジア語学センター/映画・TV

- (1) 草原と世界
- (2) 映像と教育

◆東 英児 (あずま えいじ)

NPO 法人なはまちづくりネット/映像表現

- (1) 映像制作が青少年の成長にはたす役割について

◆安藤 紘平 (あんどう こうへい)

日本映画監督協会、早稲田大学国際情報通信センター/映像表現

- (1) 映画・映像表現
- (2) デジタル映像制作手法

◆李 敬淑 (いぎよんすく)

東北大学大学院国際文化研究科国際地域文化専攻/東アジア映画論

- (1) 日本・韓国映画文化史
- (2) 植民地朝鮮映画論

◆飯島 泰裕 (いじま やすひろ)

青山学院大学社会情報学部/情報科学

- (1) マルチメディア
- (2) 情報社会

◆池川 玲子 (いけがわ れいこ)

日本女子大学、実践女子大学他(非常勤)/近現代女性史

- (1) 戦時下日本映画とジェンダー
- (2) 女性映画人

◆池田 奈津 (いけだ なつ)

映画

- (1) 戦争映画

◆石井 陽之 (いしい はるゆき)

東京服飾専門学校/映像制作

- (1) 映像制作
- (2) メディア研究

◆石坂 健治 (いしがき けんじ)

日本映画大学/映画史・映画批評

- (1) アジア諸国の映画
- (2) 日本ドキュメンタリー映画史

◆石崎 浩一郎 (いしがき こういちろう)

近・現代美術

- (1) 実験映画
- (2) 映像と絵画(美術)との相互の影響関係

◆石原 康臣 (いしはら やすおみ)

大正大学表現学部表現文化学科/現代美術、映像・写真

- (1) 映像インスタレーション研究
- (2) 萩原朔美研究

◆泉 順太郎 (いずみ じゅんたろう)

東京藝術大学大学院映像研究科博士課程/映像学

- (1) 映像編集(デジタル)という経験の考察、理論化

◆板倉 史明 (いたくら ふみあき)

神戸大学大学院国際文化学研究所/映画学

- (1) 日本映画
- (2) フィルム・アーカイブ

◆伊津野 知多 (いづの ちた)

日本映画大学/映画理論、映像論

- (1) 映像のリアリズム
- (2) 映画における触覚性の問題

◆入江 良郎 (いりえ よしろう)

東京国立近代美術館フィルムセンター/映画史

- (1) フィルム・アーカイヴ
- (2) 日本映画史

◆岩本 憲児 (いわた けんじ)

日本大学芸術学部/映画史

- (1) 日本映画史
- (2) 映画理論史

◆上田 学 (うへだ まなぶ)

東京工芸大学芸術学部非常勤講師/映画史

- (1) 無声映画の受容論
- (2) 映画と演劇の関係性

◆牛田 あや美 (うしだ あやみ)

京都造形芸術大学/映画

- (1) 戦後における映画評論の系譜
- (2) 映画とマンガの関係

◆大久保 遼 (おおくぼりょう)

東京大学大学院学際情報学府博士課程/メディア論、社会学

- (1) 19世紀転換期の映像文化

◆太田 曜 (おおた しょう)

東京造形大学(非常勤)/実験映画

- (1) 実験映画の制作を通して映画的現実が何故現実の再現のように思われるのかを研究
- (2) 今日までの内外実験映画作品

◆氏名 (しめいよみ)

所属/専門

- (1) 研究テーマ 1
- (2) 研究テーマ 2

◆大山 勝美 (おおやま かつよし)

(株) カズモ/映像制作

- (1) テレビドラマの歴史

◆岡島 尚志 (おかじま ひさし)

東京国立近代美術館フィルムセンター/映画史、映画保存

- (1) 映画史
- (2) 映画保存、フィルム・アーカイブ

◆岡田 秀則 (おかだ ひでのり)

東京国立近代美術館フィルムセンター/映画史

- (1) 映画史
- (2) 映画のアーカイビング

◆岡村 忠親 (おかむら ただちか)

全国漁業共済組合連合会総務部/映画史

- (1) 成瀬巳喜男

◆沖 啓介 (おき けいすけ)

東京造形大学/メディアアート

- (1) ゼネラティブ・アート、形態発生

◆奥 正孝 (おく まさたか)

ノースアジア大学法学部観光学科/テレビ番組制作、エンターテインメント論

- (1) まちづくりと映像

◆奥野 邦利 (おくの くにとし)

日本大学芸術学部映画学科/映像表現

- (1) 映像作品研究及びメディアアート作品制作

◆奥村 賢 (おくむら まさる)

いわき明星大学人文学部表現文化学科/映画/映像

- (1) 映画と政治の関係
- (2) 記録映画

◆櫻坂 英子 (おさか えいこ)

駿河台大学心理学部/社会心理学

- (1) 撮影行為に関する心理学的研究
- (2) 文化比較

◆加藤 到 (かとう いたる)

東北芸術工科大学映像学科/実験映画、ドキュメンタリー

- (1) ドキュメンタリー映画における実験的映像表現
- (2) デジタル・シネマ・パッケージ時代の個人制作

◆兼子 正勝 (かねこ まさかつ)

電気通信大学総合情報学専攻/映像理論

- (1) 映像理論
- (2) イメージ理論

◆金子 隆一 (かねこりゅういち)

東京都写真美術館東京総合写真専門学校/写真史

- (1) 日本近代写真史

◆上倉 泉 (かみくら いずみ)

日本大学芸術学部映画学科/映画技術

- (1) 映画技術 (録音)

◆上西 雄太 (かみにし ゆうた)

東京大学大学院学際情報学府博士後期課程学際情報学専攻/映画、メディア論

- (1) ロバート・フランクを中心とする 1950 年代のメディア文化

◆川崎 公平 (かわさき こうへい)

日本学術振興会特別研究員 PD(明治学院大学)/映像論、日本映画研究

- (1) 戦後日本の映像・図像メディアにおける恐怖表象
- (2) 黒沢清論

◆川崎 三郎 (かわさき さぶろう)

コミュニケーション理論、映画産業

- (1) コミュニケーション理論 (2) 映像産業史

◆菅野 優香 (かんの ゆうか)

北海道大学大学院文学研究科/視覚文化研究、クィア映画論

- (1) クィア映画理論・批評
- (2) 女性映画祭、LGBTQ 映画祭

◆木原 圭翔 (きはら けいしょう)

早稲田大学大学院文学研究科演劇映像学コース/映画研究

- (1) 古典的ハリウッド映画研究
- (2) スタンリー・カヴェルの映画論

◆木船 園子 (きふね そのこ)

東京工芸大学芸術学部アニメーション学科/アニメーション

- (1) アニメーション (実験アニメーション、CG アニメーション)
- (2) アニメーション装置、インスタレーション

◆木村 和代 (きむら かずよ)

(株) IMAGICA イメージワークス/映像詩

- (1) 映像が保有する時間と実時間について
- (2) 日本におけるプロジェクションマッピングの可能性

◆草原 真知子 (くさはら まちこ)

早稲田大学文学学術院/メディアアート、映像文化史

- (1) メディアアートの現在と歴史 (戦後前衛芸術からデジタル表現、デバイスアートまで)
- (2) メディア考古学的アプローチによる大衆視覚文化史研究 (パノラマ、幻燈、写し絵など)

◆久世 倫正 (くぜみちまさ)

映像記録

- (1) 「氣」の映像記録について
- (2) テレビ番組の海外取材 その歴史と変遷

◆隈部 修市 (くまべしゅういち)

(株) イメージジャパン/パッケージメディア

- (1) デザインとIT技術の融合
- (2) 伝統美を生かした商品開発

◆小出 真理子 (こいでまりこ)

(株) GK テック企画室/インタラクティブ・デザイン

- (1) インタラクティブ・デザイン

◆小岩井 孝 (こいわいたかし)

自営・旅館香蘭荘/映画

- (1) 有線テレビの番組

◆高 美賀 (こうみか)

立教大学異文化コミュニケーション学部/日本映画

- (1) 日本映画における人権表象
- (2) ジェンダーとセクシュアリティ表象

◆近藤 耕人 (こんどうこうじん)

明治大学名誉教授/文学、映像学

- (1) ベケットのFilm と、まなざし
- (2) ベケットからドストエフスキイ、セザンヌに至る道

◆斉藤 綾子 (さいとうあやこ)

明治学院大学文学部芸術学科/映画学

- (1) フェミニズム映画批評
- (2) メロドラマ研究

◆齋藤 泉 (さいとういづみ)

(株) TBS テレビ 報道局 (解説委員) / 報道

- (1) テレビ報道とメディアリテラシー
- (2) テレビにおけるドキュメントと非ドキュメント

◆坂尻 昌平 (さかじりまさひら)

映画学

- (1) 映画史
- (2) 映像と他ジャンルの関係史

◆坂本 佳子 (さかもとよしこ)

脚本

- (1) 向田邦子研究
- (2) 脚本制作

◆佐々木 悠介 (ささきゆうすけ)

工学院大学、駿河台大学、法政大学 (非常勤) / 仏語圏・英語圏の写真論

- (1) アンリ・カルティエ＝ブレッソン研究
- (2) 文学と写真のクロス・ジャンル研究

◆佐崎 順昭 (ささきよりあき)

東京国立近代美術館フィルムセンター (客員研究員) / 日本映画

- (1) 島津保次郎研究
- (2) 日本映画の文献・資料に関する研究

◆篠原 隼士 (ささはら はやと)

(株) アンクル/映画演出、映画評論

- (1) 美しい映画や、若い映像人による作品など芸術的映像
- (2) 若木映画人を志すものが集り芸術的な作品作りを行う

◆佐相 勉 (さそうつとむ)

日本映画史

- (1) 溝口健二

◆佐藤 由紀 (さとうゆき)

玉川大学芸術学部/生態心理学、演技身体論

- (1) 身体論
- (2) 発話デザイン

◆柴岡 信一郎 (しばおかしんいちろう)

日本ウェルネススポーツ大学/メディア論

- (1) メディアとスポーツの結び付き
- (2) メディア論

◆柴崎 敦 (しばさきあつし)

映像教育

- (1) 映像教育を受けた高校生の進路について

◆柴田 崇 (しばた たかし)

北海学園大学人文学部/メディア論

- (1) M. マクルーハンのメディア論
- (2) 生態心理学

◆島 啓一 (しまけいいち)

根津映画倶楽部/小形映画

- (1) 8mm, 16mm を中心としたホームムービーの保存活用

◆清水 通生 (しみずみちお)

ドキュメンタリー論

- (1) ドキュメンタリー演出
- (2) テレビ論

◆白岩 英樹 (しらいわひでき)

東京都市大学共通教育学部/米文化

- (1) 20世紀前半のアメリカ美術
- (2) 20世紀アメリカ文学

◆末岡 一郎 (すえおかいちろう)

阿佐ヶ谷美術専門学校メディアデザイン科/実験映画

- (1) 実験映画・歴史研究及び制作
- (2) アマチュア映画再考

◆氏名 (しめいよみ)

所属/専門

- (1) 研究テーマ1
- (2) 研究テーマ2

◆杉田 このみ (すぎた このみ)

一橋大学/映像教育、ドラマ制作

- (1) 地域に根差した映像制作

◆杉野 健太郎 (すぎの けんたろう)

信州大学人文学部 (英米文学・文化) /アメリカ映画

- (1) アメリカン・ドリームの映像文化学
- (2) 現代日本映画

◆鈴木 志郎康 (すずき しろうやす)

映画制作

- (1) 個人映画制作
- (2) 個人映画理論

◆鈴木 康弘 (すずき やすひろ)

日本大学芸術学部放送学科/映像演出

- (1) テレビドキュメンタリーにみる作家性の存在
- (2) テレビドラマと時代の相関関係

◆須藤 健太郎 (すどう けんたろう)

Université Paris 3, Cinéma et audiovisuel /映画史・映画美学

- (1) 60-70年代のインディペンデント映画 (主にフランス)
- (2) 映画と造形芸術

◆須藤 清夏 (すとう さやか)

日本大学大学院芸術学研究科博士前期課程映像芸術専攻/映画

- (1) 映画の脚本について、作品ができるまでの過程を調べる。
- (2) イメージボードを使って、作品ができる過程を調べる。

◆角井 誠 (すみい まこと)

日本学術振興会特別研究員PD/映画論、表象文化論

- (1) ジャン・ルノワール研究 フランス映画における演技論の展開

◆瀬島 久美子 (せじま くみこ)

名古屋芸芸大学メディア造形学部映像メディア学科/映像論

- (1) 都市及び情報と映像

◆高橋 克三 (たかはし かつぞう)

(株)ワトソنز、駒沢大学 (非常勤) /映像教育

- (1) 映像による街おこし
- (2) 映像人材育成

◆高橋 恭子 (たかはし きょうこ)

早稲田大学政治経済学術院/映像ジャーナリズム

- (1) メディア・リテラシー
- (2) オルタナティブ・メディア

◆高橋 秀樹 (たかはし ひでき)

(株)クリア/映像制作、バラエティ番組、発達障害

- (1) 映像制作
- (2) 発達障害

◆高山 隆一 (たかやま りゅういち)

東京工芸大学芸術学部映像学科/映画

- (1) フィルム製作
- (2) 映像教育

◆瀧 健太郎 (たき けんたろう)

早稲田大学川口芸術学校NPO法人ビデオアートセンター東京/ビデオアート、メディアアート

- (1) ビデオアートの変遷と今日的意義
- (2) アヴァンギャルド芸術とメディア技術

◆竹内 彰啓 (たけうち あきひろ)

東北学院大学教養学部/社会学

- (1) 映像社会学の理論と方法
- (2) 余暇集団の映像エスノグラフィー

◆武内 太一 (たけうち たいち)

日経ナショナルジオグラフィック社編集担当補佐/デジタルメディアディレクター/編集

- (1) 映像を利用した電子書籍

◆竹内 正人 (たけうち まさと)

日本工学院専門学校、立教大学文学部・法学部 (非常勤) /映像教育

- (1) 比較表現 (2) 映像教育

◆竹上 正明 (たけがみ まさあき)

写真

- (1) デジタル写真合成・加工による幻想表現の研究

◆武田 潔 (たけだ きよし)

早稲田大学文学学術院/映画理論

- (1) 映画の自己反省作用
- (2) フランス映画言説史

◆竹林 紀雄 (たけばやし のりお)

文教大学情報学部広報学科放送・映像分野、文教大学大学院情報学研究科映像表現専攻/映像表現

- (1) 新しいテクノロジーが拓く映像表現の可能性についての研究
- (2) テレビのメディア特性を活用したドキュメンタリー番組についての研究

◆竹峰 義和 (たけみね よしかず)

東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻/ドイツ思想、映像文化論

- (1) フランクフルト学派の映像メディア論
- (2) ドイツ映画亡命史

◆田島 良一 (たじま りょういち)

日本大学芸術学部映画学科/日本映画史

- (1) 永田雅一研究

◆田村 順也 (たむら じゅんや)

(株) ティ・ジョイ興行部企画開発室/映画興行

- (1) 映画脚本
- (2) ホラー・怪談映画

◆田村 千穂 (たむら ちほ)

東京大学大学院学際情報学府学際情報学専攻博士課程/映画学

- (1) ジークフリート・クラカウアー論
- (2) 映画女優論

◆鶴田 誠 (つるた まこと)

東京工科大学学務課/Web デザイン

- (1) Web デザインとコンテンツ

◆丁 祈方 (てい きほう)

國立臺灣藝術大學電影學系映画学科/映画

- (1) 映画製作、映画・映像製作
- (2) 映画産業

◆寺嶋 春菜 (てらしま はるな)

映像

- (1) 具体音楽映像
- (2) 2D と 3DCG とアニメーションの SNS における未来への可能性

◆戸田 昌子 (とだ まさこ)

武蔵野美術大学 (非常勤) /写真史

- (1) 報道写真の通史研究

◆友田 義行 (ともだ よしゆき)

信州大学教育学部/日本近現代文学、映画

- (1) 日本文学と映画の相関研究
- (2) 勅使河原宏監督研究

◆鳥山 正晴 (とりやま まさはる)

日本大学芸術学部映画学科/映画

- (1) 映画演出
- (2) シナリオ

◆中川 伊希 (なかがわ いき)

フリー/映像制作

- (1) サステナビリティ
- (2) 映画制作を使ったコンフリクトレゾリューション

◆中川 邦彦 (なかがわ くにひこ)

映画論

- (1) 持続可能社会を映像により研究
- (2) 映画物語の形相論

◆中島 崇 (なかじま たかし)

東京造形大学 (非常勤) /映像

- (1) 実験映画、ビデオアート、デジタル映像の歴史的発展
- (2) 展示としての映像形態史

◆中野 昭慶 (なかの てるよし)

監督 (演出)

- (1) 特殊映像

◆中村 秀之 (なかむら ひでゆき)

立教大学現代心理学部映像身体学科/映画研究、文化社会学、表象文化論

- (1) 1950 年代の映画と映画文化の研究 (日, 米, 仏を中心に)
- (2) スクリーンと身体の関係をめぐる歴史的詩学

◆仲村 浩 (なかむら ひろし)

(株) 電通テック テックインスティテュート東京工芸大学/広告・プロモーション

- (1) 広告・プロモーション
- (2) 展示映像、イベントスペース映像

◆中谷 美二子 (なかや ふじこ)

(株) プロセスアート/ビデオアート

- (1) 環境彫刻 (素材:霧)

◆中山 信子 (なかやま のぶこ)

映画史

- (1) 日仏映画交流史

◆名手 久貴 (なて ひさき)

東京工芸大学芸術学部映像学科/視覚

- (1) 立体映像観察時の視覚疲労について

◆仁井田 千絵 (にいた ちえ)

早稲田大学総合人文科学研究センター/映画学

- (1) アメリカ映画史
- (2) 映画とラジオ、演劇の関係

◆西村 安弘 (にしむら やすひろ)

東京工芸大学芸術学部映像学科/映画学

- (1) イタリア映画史
- (2) 映画理論の現象学的研究

◆野地 朱真 (のじすま)

尚美学園大学芸術情報学部情報表現学科/コンピュータ・グラフィック

- (1) コンピュータ・グラフィックスによる造形・モーション表現
- (2) 広視野・インタラクティブ・メディアアート

◆野田 慶人 (のだ よしと)

日本大学芸術学部放送学科/放送広告

- (1) TVCM 史
- (2) TVCM の表現の可能性

◆氏名 (しめいよみ)

所属/専門

- (1) 研究テーマ 1
- (2) 研究テーマ 2

◆長谷川 功一 (はせがわ こういち)

北海道大学大学院文学研究科専門研究員/アメリカ映画

- (1) フィルム・ノワール研究

◆波多野 哲朗 (はたの てつろう)

日本大学大学院芸術学研究科/映像学・映画学

- (1) 映像芸術と現代諸芸術との関係
- (2) 芸術概念の変容と映画

◆羽太 謙一 (はぶと けんいち)

女子美術大学アート・デザイン表現学科メディア表現領域/アートアニメーション

- (1) アートアニメーションの教育
- (2) デザインとアートを活かした地域づくり

◆浜野 保樹 (はまの やすき)

東京大学名誉教授東京工科大学メディア学部/メディア論

- (1) コンテンツ制作
- (2) コンテンツ輸出入

◆原 直久 (はら なおひさ)

日本大学芸術学部写真学科/写真芸術

- (1) 写真表現におけるアナログとデジタルの融合

◆原田 健一 (はらだ けんいち)

新潟大学人文学部人文社会・教育科学系/映像社会学

- (1) 映像社会学
- (2) デジタル映像アーカイブ

◆播磨 徹 (はりま とおる)

千葉商科大学/映像技術・表現

- (1) 記憶の再視覚化
- (2) 規格特性の表現

◆日高 優 (ひだか ゆう)

群馬県立女子大学文学部英米文化学科/写真論

- (1) 現代アメリカ写真
- (2) 写真メディアと社会

◆百束 朋浩 (ひやくそく ともひろ)

東京工芸大学芸術学部/映像学

- (1) 映像のマルチユース時の認知相関
- (2) ハイブリッドコンテンツ制作時の画面サイズとレゾリューションの自動決定アルゴリズム

◆平岡 栄一 (ひらおか えいいち)

日本工学院八王子専門学校マンガ・アニメーション科/映像編集

- (1) 次世代アニメーターの教育技法

◆平野 共余子 (ひらの きょうこ)

フリー・ライター/映画史

- (1) 東欧映画
- (2) 映画上映

◆廣澤 文則 (ひろさわ ふみのり)

日本大学芸術学部映画学科/映画撮影

- (1) 映画技術史
- (2) 映画カラーフィルム史

◆藤井 仁子 (ふじい じんし)

早稲田大学文学学術院/映画学

- (1) トーキー化後の日本映画研究 (記録映画を含む)
- (2) プロダクション・コード廃絶後の現代アメリカ映画研究

◆星野 和彦 (ほしの かずひこ)

星野演出事務所/映像演出

- (1) 祝祭空間に於ける映像 Collection
- (2) 祇園通過儀礼の映像教材

◆前澤 哲爾 (まえざわ てつじ)

山梨県立大学国際政策学部国際コミュニケーション学科/映画振興

- (1) 映画振興政策論
- (2) 映画産業論

◆まつかわ ゆま

日本万華鏡博物館 / (株) ベアーズ、明治学院大学大学院博士課程/映画学

- (1) ドキュメンタリー作家松川八洲雄の仕事 その芸術と時代
- (2) '90年代ハリウッドにおける女性映画人、とくにプロデューサーの仕事とその受容について

◆丸池 納 (まるいけ なおみ)

桜美林大学芸術文化学群映画専修/映画撮影

- (1) 映画撮影技術

◆三浦 なつみ (みうら なつみ)

藤女子大学 (非常勤講師) / 写真論

- (1) ロラン・バルト写真論

◆三橋 純 (みつはし じゅん)

横浜美術大学/写真

- (1) 写真史・写真表現・現代写真の変容
- (2) メディア研究

◆宮田 徹也 (みやた てつや)

近 / 現代日本美術研究

- (1) 日本実験映像の諸相
- (2) コラボレーションの可能性

◆三輪 健太郎 (みわ けんたろう)

学習院大学大学院人文科学研究科身体表象文化学専攻博士課程 / 日本学術振興会特別研究員 / 表象文化学
 (1) マンガと映画の比較メディア論

◆元村 直樹 (もとむら なおき)

早稲田大学国際情報通信研究科 / 映画・映像
 (1) 映画・映像の制作手法
 (2) 映画・映像制作の教育

◆森田 和夫 (もりた かずお)

駒沢女子大学人文学部映像コミュニケーション学科 / モーショングラフィックス、CG
 (1) 映像表現とデザイン
 (2) デジタル・アニメーション

◆森永 純 (もりなが じゅん)

写真
 (1) 水の研究

◆守安 敏久 (もりやす としひさ)

宇都宮大学教育学部 / 日本近代文学
 (1) 文学と映画との相互影響の研究
 (2) 寺山修司研究

◆八木 信忠 (やぎのぶただ)

日本大学芸術学部 / 映像技術
 (1) 映像技術史
 (2) 映像のパースペクティブ

◆矢澤 利弘 (やざわ としひろ)

映画専門大学院大学映画プロデュース研究科 / 映画産業論
 (1) 映画祭のマネジメント
 (2) ダリオ・アルジェント

◆八文字 俊裕 (やつもんじ としひろ)

(有) メディアハウスユー / テレビ放送
 (1) SIGGRAPH 米国コンピュータ学会に於けるテレビ映像の推移
 (2) SIGGRAPH に於けるメディアアートの歴史

◆箭内 匡 (やないただし)

東京大学大学院総合文化研究科文化人類学研究室 / 文化人類学
 (1) イメージ / 映像と文化人類学の理論・実践
 (2) イメージの哲学 (特にスピノザ)

◆柳原 謙一 (やなぎはら けんいち)

YAN KEN DOODLE / 映像企画演出
 (1) チーム DOQUILLO による新世界の構築 (キャラクター、ストーリー、映像化)
 (2) 1984 年出版した自著の復刻と DVD 化「マンハッタンはニューヨーク」

◆山田 知佳 (やまだ ちか)

日本大学文理学部人文科学研究科 / ドイツ映画史
 (1) ドイツ無声映画史について

◆山中 剛史 (やまなか たけし)

日本大学芸術学部 (非常勤) / 日本近代文学
 (1) 谷崎潤一郎と映画
 (2) 文学 映像のアダプテーション

◆山根 千明 (やまね ちあき)

昭和大学富士吉田教育部 (兼任講師) / 美術史
 (1) バウハウス学生 L. ヒルシュフェルト=マックの《色光運動》(1922-25)
 (2) 色彩をモチーフとした動画像作品

◆横川 真顯 (よこかわ しんけん)

日本大学大学院芸術学研究科 / 映画分析
 (1) 映画作品の文化側面からの研究
 (2) 映画作品の動向分析

◆横田 安正 (よこた あんせい)

フィルム演出
 (1) ドキュメンタリーの構成法
 (2) 映画評論

◆吉村 和文 (よしむら かずふみ)

(株) ケーブルテレビ山形 / 放送、通信
 (1) ICT を活用した地域イノベーション
 (2) コンテンツの流通と保管のシステムづくり

◆李 仙姫 (りー せんひ)

(有) ビアンドエス企画 / 映像表現様式
 (1) ナム・ジュン・パイクの作品研究

◆李 容旭 (りょんうく)

東京工芸大学芸術学部映像学科映像造形領域 / 映像表現
 (1) 映像とアートとの関係性とその可能性
 (2) 電子メディア時代の映像表現の創造性とその可能性

◆渡部 英雄 (わたなべ ひでお)

湘南工科大学工学部コンピュータ応用学科 / 映画学(映像)、アニメ演出、アニメーター
 (1) 仮面劇とアニメーション～日本のアニメーションの起源を探る～
 (2) 商業アニメーションの技術史～デジタルアニメーションに於ける演出法

◆氏名 (しめいよみ)

所属/専門

- (1) 研究テーマ 1
- (2) 研究テーマ 2

関西支部

◆安部 孝典 (あべ たかのり)

関西学院大学大学院文学研究科博士後期課程美学芸術学専攻/映画

- (1) フランス映画

◆雨宮 幸明 (あめみや こうめい)

立命館大学大学院文学研究科博士後期課程人文学専攻/日本近代文学、プロレタリア映画運動

- (1) プロレタリア映画運動とプロレタリア文学運動の研究

◆石田 美紀 (いしだ みり)

新潟大学人文学部映像文化論/映像文化論

- (1) 映像文化
- (2) 映画美学

◆伊集院 敬行 (いじゅういん たかゆき)

島根大学法文学部言語文化学科/デザイン論、映像論

- (1) 中井正一の映画論にある存在論と精神分析理論の影響について
- (2) ル・コルビュジェのブルータリズム研究

◆伊藤 高志 (いとう たかし)

京都造形芸術大学映画学科/実験映像

- (1) 映画における風景と身体の関係

◆伊奈 新祐 (いな しんすけ)

京都精華大学芸術学部映像コース/映像 / メディアアート

- (1) ビデオアートの歴史
- (2) メディアアートとしての映像

◆稲垣 貴士 (いながき たかし)

大阪成蹊大学芸術学部映像メディア表現領域/映像・音響

- (1) 映像表現における音楽・音響

◆今井 隆介 (いまいりゅうすけ)

花園大学文学部創造表現学科/アニメーション

- (1) アニメーション史
- (2) アニメーション理論

◆今田 健太郎 (いまだ けんたろう)

四天王寺大学人文社会学部/音楽学

- (1) 日本における初期映画の音・音楽についての研究
- (2) テレビ等における劇伴の音・音楽についての研究

◆打田 素之 (うちだもとゆき)

神戸松蔭女子学院大学/映像論

- (1) 映画と精神分析

◆遠藤 賢治 (えんどう けんじ)

大阪芸術大学芸術学部キャラクター造形学科/アニメーション

- (1) アニメーション制作研究
- (2) 立体造形制作研究

◆大橋 勝 (おおはしまさる)

大阪芸術大学映像学科/実験映像

- (1) 実験映画、ビデオアートの研究
- (2) 常時上映のための映像表現

◆小川 丈治 (おがわ じょうじ)

ドキュメンタリー製作

- (1) 「映像ジャーナリズム」負の遺産
- (2) 映像表現と言語表現の特質

◆奥野 卓司 (おくの たくじ)

関西学院大学社会学部/情報人類学

- (1) 日本の情報コンテンツの東アジアでの展開
- (2) 映像にみる人間と動物の関係

◆加藤 哲弘 (かとう てつひろ)

関西学院大学文学部/美学、イメージ学

- (1) アビ・ヴァールブルクとイコノロジー
- (2) 現代におけるイメージ学の可能性

◆亀井 克朗 (かめい かつろう)

台湾興國管理學院/映画美学

- (1) アンドレイ・タルコフスキーの作品研究
- (2) 現象学的映画論

◆川村 健一郎 (かわむらけんいちろう)

立命館大学映像学部/映画史

- (1) 日本のドキュメンタリー
- (2) ミュージアム・マネジメント

◆栗林 源一郎 (くりばやしげんいちろう)

京文映 (NPO) / 写真、映像

- (1) 映像に於ける照明の必要性和重要性

◆桑原 圭裕 (くわばらよしひろ)

関西学院大学文学部 (非常勤講師) / 映画・アニメーション

- (1) 日本アニメーションにおける動きの研究
- (2) アンサンブル・フィルム研究

◆櫻井 宏哉 (さくらいひろや)

成安造形大学メディアデザイン領域映像・放送コース/映像デザイン

- (1) 映像インスタレーション

◆新宮 一成 (しんぐう かずしげ)

京都大学大学院人間・環境学研究所/精神病理・精神分析

- (1) 無意識の構造と映像受容・表現の構造の関係
- (2) 精神の病理と映像体験の関係

◆新堀 孝明 (しんぼり たかあき)

美術

- (1) 映像メディアにおける表現形態の追究

◆菅原 慶乃 (すがわらよしの)

関西大学文学部映像文化専修/映画史

- (1) 中国語圏映画史

◆杉本 達應 (すぎもと たつお)

福山大学人間文化学部メディア情報文化学科/メディアアート

- (1) デジタル表現ワークショップのシステム開発

(2) デジタルメディア表現の歴史文化

◆鈴木岳海 (すずき たかみ)

立命館大学映像学部／映像人類学

- (1) 民族誌映像作品制作
- (2) 日常と記憶、感覚に関する映像人類学的研究

◆千光士 義和 (せんこうじ よしかず)

京都嵯峨芸術大学短期大学部／アニメーション、美術・造形

- (1) アニメーション(視覚)玩具の研究
- (2) 立版古(組み上げ灯籠)の映像による保存と研究

◆瀧波 崇 (たきなみ たかし)

大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻／映画理論

- (1) 映画理論

◆田中 晋平 (たなか しんぺい)

大阪芸術大学大学院(嘱託助手)／映像学

- (1) テオ・アンゲロプロス研究

◆田之頭 一知 (たのがしら かずとも)

大阪芸術大学芸術学部／美学・音楽美学

- (1) 映画音楽
- (2) 藝術の時間性

◆富田 美香 (とみた みか)

立命館大学映像学部／映画史

- (1) 日本映画史
- (2) 映像アーカイブ

◆豊原 正智 (とよはら まさと)

大阪芸術大学芸術学部芸術計画学科／映像学

- (1) 映像テクノロジーと表現形式の関係について
- (2) デジタル技術と視覚の形式について

◆永田 彰三 (ながた しょうぞう)

関西学院大学文学部美学科／演劇学

- (1) 演劇
- (2) 劇映画

◆中村 聡史 (なかむら さとし)

関西学院大学／帝塚山学院大学(非常勤講師)／映像

- (1) アメリカ映画
- (2) 日本映画

◆新居 理絵 (にいりえ)

(公財)京都服飾文化研究財団学芸課／ファッション

- (1) 20世紀後期ファッション

◆二瓶 晃 (にいへい あきら)

同志社女子大学学芸学部情報メディア学科／メディア・アート

- (1) インタラクティブィティを伴うインスタレーション作品の研究・制作
- (2) デジタルメディアにおけるデザインとアートの教育に関する研究

◆萩原 由加里 (はぎはら ゆかり)

立命館大学大学院先端総合学術研究科一貫制博士課程／アニメ、マンガ

- (1) アニメーションの技術史
- (2) アニメ・マンガの受容形態の変化

◆林 日出夫 (はやし ひでお)

大阪芸術大学キャラクター造形学科／漫画、アニメーション

- (1) 漫画とアニメーションのキャラクター
- (2) 設定と構造から見たキャラクターの動かし方

◆平塚 真美子 (ひらつか まみこ)

英文学

- (1) 比較文化 東洋と西洋におけるシェイクスピア解釈の違い
- (2) グリナウェイの映像的表象—古典作品、シェイクスピア及び清少納言などにみる

◆平野 知映 (ひらの ちえ)

京都嵯峨芸術大学／映像

- (1) メディアアート(実験映像)
- (2) アニメーション(3DCG)

◆福原 正行 (ふくはら まさゆき)

花園大学創造表現学科／コンテンツ論

- (1) クロス・メディアの背景に展開するコンテンツの制作開発
- (2) モーション・グラフィックスによるヴィジュアル・コミュニケーションの可能性

◆藤田 明史 (ふじた あきふみ)

関西学院大学大学院文学研究科美学研究室／美学芸術学

- (1) 舞踏学

◆前田 茂 (まえだ しげる)

京都精華大学人文学部文化表現学科／美学・芸術学

- (1) 20世紀初頭の英国における既存の芸術に関する言説への映画の影響
- (2) 近代児童描画教育および美術教育の思想的・文化的背景

◆前田 恵 (まえだ めぐみ)

大阪大学・同志社大学／ロシア・ソ連映画史

- (1) ロシア・ソ連映画史におけるグレゴリー・チュフライの位置づけ

◆増田 幸子 (ますだ さちこ)

立命館大学産業社会学部／メディア・コミュニケーション

- (1) 映像メディアにおけるジェンダー・エスニシティ表象
- (2) 日本のテレビドラマ研究

◆増田 展大 (ますだ のぶひろ)

日本学術振興会特別研究員／芸術学、映像文化論

- (1) 19世紀末フランスにおける身体の測定とその表象

◆松尾 好洋 (まつお よしひろ)

(株)IMAGICA ウェストフィルムプロセス部／映画修復

- (1) 映画フィルム修復技術

◆松岡 佳世 (まつおか かよ)

大阪大学大学院文学研究科博士後期課程美学専攻／美学

- (1) シュルレアリスムの芸術創造における科学的思考
- (2) 写真からみるハンス・ベルメール作品

◆水田 百合子 (みずた ゆりこ)

大阪大学大学院文学研究科博士後期課程文化表現論専攻(美学研究室)／映画

- (1) ジャン・コクトーの映画

◆氏名 (しめいよみ)

所属/専門

- (1) 研究テーマ 1
- (2) 研究テーマ 2

◆三宅 祥雄 (みやけ よしお)

大阪大学大学院文学研究科/哲学

- (1) サルトル以降のフランス現代思想
- (2) 映像論

◆宮前 周司 (みやまえ しゅうじ)

関西テレビ放送(株)報道部/ドキュメンタリー

- (1) テレビドキュメンタリー

◆孟 祥宇 (もうしょうう)

京都精華大学マンガ学部アニメーション学科(非常勤)/芸術

- (1) デジタル映像表現におけるレイヤー構造について

◆森 公一 (もり こういち)

同志社女子大学情報メディア学科/メディアアート

- (1) 芸術と科学

◆森田 亜紀 (もりた あき)

倉敷芸術科学大学芸術学部美術工芸学科/美学

- (1) 芸術体験の現象学的研究

◆森友 令子 (もりともれいこ)

大阪国際大学現代社会学部情報デザイン学科/グラフィックデザイン、
広告デザイン

- (1) 「描写するまなざし」と「複製する視線」についての考察
- (2) 東映動画長編アニメ「白蛇伝」にみる表現の有り様について

◆安来 正博 (やすぎまさひろ)

国立国際美術館学芸課/日本近現代美術

- (1) 日本グラフィックデザイン史
- (2) 現代絵画

◆山崎 均 (やまざきひとし)

神戸芸術工科大学/美術館学

- (1) 美術館学
- (2) ホログラフィーを含む現代美術

◆山田 幸平 (やまだこうへい)

大阪芸術大学名誉教授/美学・美術史学

- (1) 映像作品と諸芸術との関係
- (2) 映像と造形芸術

◆山本 忠宏 (やまもとただひろ)

神戸芸術工科大学先端芸術学部まんが表現学科/写真、映画

- (1) 映像における動きについての研究
- (2) 映像とまんがの関係性についての研究

◆横濱 雄二 (よこはまゆうじ)

甲南女子大学文学部日本語日本文化学科/現代視聴覚文化

- (1) 日本の商業アニメーションとメディアミックス
- (2) 日本の戦後映画

◆吉川 直哉 (よしかわ なおや)

宝塚大学造形芸術学部/写真

- (1) 写真芸術
- (2) 写真教育

◆吉田 眸 (よしだひとみ)

京都産業大学文化学部/ドイツ文学、映画学

- (1) カフカと映画
- (2) 成瀬巳喜男

◆吉村 健一 (よしむらけんいち)

神戸大学大学教育推進機構/芸術学

- (1) 文化史の哲学

中部支部

◆青山 太郎 (あおやま たらう)

名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士前期課程国際多元文化専攻/
映像哲学、映像デザイン

- (1) 映像制作における触覚的・感覚的知性の涵養についての研究

◆伊藤 明倫 (いとう あきひと)

中京大学、他/映像、インスタレーション

◆大島 淳子 (おおしま きよこ)

愛知県立芸術大学、名古屋学芸大学(非常勤講師)/芸術工学

- (1) 図学並びにデザイン図法

◆小川 順子 (おがわ なおこ)

中部大学人文学部コミュニケーション学科/日本文化論

- (1) 日本映画に表れた文化的事象(とりわけプログラム・ピクチャーを中心に)
- (2) 神代辰巳

◆梶原 克教 (かじはら かつり)

愛知県立大学外国語学部/英語圏文化

- (1) 言表可能なものと可視的なものの関係
- (2) 映像と無意識の関係

◆北市 記子 (きたいちのりこ)

静岡産業大学情報学部情報デザイン学科/メディアアート

- (1) テクノロジーアートにおける言説とメディア

◆黒田 皇 (くろだこう)

大垣女子短期大学デザイン美術科/メディア表現

- (1) アニメーション表現に関する研究 映像表現、ストーリー、デジタルツール

◆小松崎 拓男 (こまつざきたくお)

金沢美術工芸大学美術工芸学部/Contemporary Art

- (1) Modern and Contemporary Art of Japan
- (2) Media Art

◆嶋田 勝彦 (しまだかつひこ)

生体運動

- (1) 画像計測方法
- (2) 生体運動

◆徐 冬梅 (じょとうばい)

名古屋大学大学院文学研究科博士課程人文学専攻/日本文化学

- (1) チャン・ツイイーのイメージ形成 グローバル化時代の中国映画スター

◆永田 司 (ながたつかさ)

プラザ工業(株) 総合デザイン部/ユーザーインターフェイスデザイン

- (1) ユーザーインターフェイスデザイン

◆西尾 祥子 (にしおしょうこ)

メディア論

- (1) パブリック・ビューイング研究
(2) ドイツメディア論

◆野崎 悠子 (のざきゆうこ)

YUPLOT 造形研究室/デザイン

- (1) 環境デザイン クロスオーバーメディア探査
(2) 造形デザイン

◆長谷川 詩織 (はせがわしおり)

愛知教育大学教育創造開発機構大学教育研究センター/アメリカ文化

- (1) アメリカ文化
(2) アメリカ映画

◆畑 あゆみ (はたあゆみ)

山形国際ドキュメンタリー映画祭事務局/記録映画史

- (1) 日本記録映画史・映画理論

◆平山 聡 (ひらやまさとし)

有限会社マオ 平山映像事務所、一般社団法人日本ホリスティックライフ協会/映像制作

- (1) ホリスティック医学全般の映像による取材研究
(2) 映像による仏教思想の表現

◆水野 勝仁 (みずのまさのり)

名古屋芸術大学デザイン学部/メディアアート

- (1) ポストインターネットにおける画像のあり方
(2) ユーザ・インターフェイス上の画像のあり方

◆森田 剛光 (もりたたくみ)

名古屋大学大学院文学研究科博士研究員/映像人類学

- (1) ネパール・ヒマラヤの山岳地域における映像人類学的手法を用いた民族誌研究
(2) 民族誌映像の制作、アーカイブ構築と活用

◆楊 紅雲 (ようこううん)

中京大学国際教養学部(非常勤)/中国映画/中国語、日本映画

- (1) 東映映画産業史
(2) 中国映画の産業構造

◆吉野 まり子 (よしのまりこ)

名古屋学芸大学メディア造形学部映像メディア学科/ドキュメンタリー

- (1) ドキュメンタリー
(2) 紛争とジャーナリズム

◆和田 伸一郎 (わだしんいちろう)

中部大学人文学部コミュニケーション学科/メディア論

- (1) 情報メディアの政治経済的考察
(2) 視聴覚メディアの哲学的考察

西部支部

◆井上 貢一 (いのうえこういち)

九州産業大学芸術学部デザイン学科/情報デザイン

- (1) 電子媒体における情報のデザイン

◆瓜生 隆弘 (うりゅうたかひろ)

近畿大学九州短期大学生活福祉情報科/CG、デジタル映像

- (1) コンピュータを用いたグラフィックデザインの研究
(2) 統計解析法を用いたデザイン開発の研究

◆熊谷 武洋 (くまがいたけひろ)

山口大学教育学部表現情報処理教室/メディア・コンテンツ

- (1) メディアコンテンツ
(2) デジタルマンガ

◆栗原 詩子 (くりはらうたこ)

西南学院大学/音楽学

- (1) アニメーションにおける音・音楽表現
(2) 映画と宗教

◆佐藤 慈 (さとうしげる)

九州産業大学芸術学部写真映像学科/画像工学

- (1) ルックが鑑賞者に与える心理的効果

◆中村 滋延 (なかむらしげのぶ)

九州大学大学院芸術工学研究院 CCD 部門/音楽・映像アート

- (1) 小津安二郎映画における音の構造的機能
(2) ソフトウェアアートの創造特性と可能性

◆西田 紘子 (にしだひろこ)

九州大学芸術工学研究院/音楽学

- (1) 近代ドイツの音楽作品論

◆東 義真 (ひがしよしまさ)

東亜大学芸術学部/映画

- (1) ヨーロッパ映画(フェリーニ、レオーネ、ベッソン)
(2) アメリカ映画(スピルバーグ、ルーカス、ゼメキス)

◆八尋 義幸 (やひろよしゆき)

福岡市総合図書館映像資料課/アジア映画

- (1) アジア映画

◆脇山 真治 (わきやましんじ)

九州大学芸術工学研究院/マルチ映像論

- (1) マルチ映像の表現とコミュニケーション特性
(2) 展示映像の記録・保存に関する研究

フォーラム

事務局

■教員公募のお知らせ

名古屋大学大学院文学研究科・文学部

「日本近代文学・文化史」「映像学・視覚文化」担当教員の公募について

1. 職名：教授または准教授（任期なし）
2. 採用人員：「日本近代文学・文化史」1名、「映像学・視覚文化」1名
3. 職務の内容：
 - (1) グローバル 30 国際プログラム（「アジアの中の日本文化」プログラム）、文学部・文学研究科および全学共通教育の専門分野に関する授業を担当する。
 - (2) 2014 年 10 月 1 日から文学部・文学研究科で実施予定の、外国人留学生及び帰国子女生を対象としたグローバル 30 国際プログラムに関する業務を担当する。
 - (3) その他必要とされる業務を行う。
4. 採用予定日：2013 年 10 月 1 日（火）
5. 応募資格：次の条件に該当する者
 - (1) A「日本近代文学・文化史」、B「映像学・視覚文化」のいずれかの分野を専攻し、国際的な視野から日本の文化または日本と東アジアの関係に関する研究を行っている者。(A B の分野にまたがって専攻している者については 2 通同時に応募することを可とする)
 - (2) 博士の学位を有する者、またはこれに相当する研究業績を有する者。
 - (3) 英語および日本語による授業を担当することができる者。
 - (4) 国際交流の推進と留学生への支援に対する幅広い展望と熱意を有する者。
 - (5) 国籍は問わない。ただし、職務の遂行に必要な日本語運用能力を有する者。
6. 応募書類：
 - (1) 履歴書（写真貼付、電子メールアドレスを明記すること）1 通
 - (2) 研究業績一覧 1 部（A4 判）
 - (3) 主要著書・論文（博士論文を含めてもよい）3 点（別刷・コピーも可。業績リストに＊を付すこと）。それぞれ要旨を添えること。（要旨は英文でも可）
 - (4) 採用後における研究・教育の抱負（日本語または英語。A4 判 2 枚程度）
 - (5) 博士学位取得証明書（博士の学位を有する者のみ）
7. 応募期限：2013 年 1 月 2 1 日（月）（必着）
8. 応募書類提出先：〒 464-8601 愛知県名古屋市千種区不老町
名古屋大学大学院文学研究科研究科長 木俣元一（宛）

封筒の表に「日本近代文学・文化史」または「映像学・視覚文化」と朱書きし、書留にて郵送のこと。両方の分野に応募する場合はそれぞれに書類を作成し提出すること。

編集後記

総務委員会

■会員の皆様 新年明けましておめでとうございます。今回は第 39 回大会第 1 通信が掲載されております。奮って大会参加頂きますようご予定ください。■新版会員名簿が刊行されました。総務委員会報告にある通り、学会ホームページにおける会員ログイン用パスワードなどが発送時に添付同封されています。ご確認ください。■学会も会員の皆様も豊原会長の下、多種多様に新年も益々の発展がありますようご祈念申し上げます。（遠藤）

総務委員会報告

古賀 太

前回の会報で予告した通り、学会HPの中に会員のみアクセス可能なページを作ります。会員ユーザー名とパスワードの入力が必要ですが、詳細は新版会員名簿に添付するマニュアルをご覧ください。

総務委員会では、より会員の利益を向上させるために、このたび大会参加費を 5 千円から 3 千円に減額する提案をし、12 月 1 日の常任理事会において承認されました。これによって地方の大会開催校など財政が厳しくなる場合には、本部より補助金額を従来より増やします。

また、学生の学会への入会金を無料にすることも理事会に提案しました。こちらは会則の変更を伴うため、来年の総会で審議されます。

以上

(こがふとし/総務委員長、日本大学芸術学部)

お詫びと訂正

会報第 160 号に誤植がありました。お詫びし訂正します。

45 ページ左段

(誤) → (正)

龍波 崇 瀧波 崇

9. 選考方法：

- (1) 第一次審査 書類審査
- (2) 第二次審査 面接（あわせて模擬授業を行っていただきます。面接のための旅費等は応募者の負担となります）

10. 注意事項：

- (1) 選考過程において追加的な業績の提示を求めることがあります。
- (2) 応募書類によって取得した個人情報、本教員選考の目的以外で利用したり外部に提供したりすることはありません。

11. 問い合わせ先：〒 464-8601 名古屋市千種区不老町
名古屋大学大学院文学研究科 坪井秀人
Fax. 052-789-2666 文系総務課総務グループ（文学担当）

12. その他：

名古屋大学は女性教員比率向上のためのポジティブ・アクションを実施しています。

<http://www.nagoya-u.ac.jp/about-nu/declaration/positive>

以上